

上野明子作 「生きるとは」

上野明子ナレーション わたしの入学したのは、受験校として有名な高校でした。ですから、始めはとても厳しい学校だろうと思っていましたが、だんだん慣れてくると、非常に開放的な学校だということが分かってきました。でもわたしはなかなか友達に打ち解けませんでした。小さいころから内向的な性格で、人の前では思ったことをなかなか言うことができなかったのです。そのくせ、いつも心の中では何かを求めているのです。そんなわけで、クラブもすぐにやめてしまい、毎日、ただ学校へ行って帰ってくるという繰り返しでした。そのうちに、わたしは、疲れや体のむくみを覚えるようになりました。母が心配して、何回も病院に検査に行きましたが、原因が分かりませんでした。そんなある日のこと、家に帰ると、父と母がケンカをしていました。母の妹の礼子叔母さんのことで、父が大きな声でどなっているのです。

父 礼子が離婚するからってなんだ！ お前はうちのことをしていればいいじゃないか！ おれがもう一度考え直すように言ってきてやる！

母 やめてください。あなたが行ったら、礼子がかわいそうです。

父 うるさい！

効果音 (ドアが閉まる音)

母 (泣き声)

明子 ママ、どうしたの？

母 いいのよ、アコちゃん、あんたは心配しなくて。

明子 礼子叔母さん、離婚すんでしょ。子供たちはどうなるのかしら。

母 本当に、子供がかわいそう。パパはひどいのよ。ママが、心配で家の仕事が手につかないってうだけなのに。——(思い切って)アコちゃん、思い切って言うわね。実はね、礼子は、ママの子なのよ。

明子 え?!

母 礼子は、お父さんが違うのよ。あの子は小さい時から苦労してきて…。パパと結婚した時も、独り、田舎のおばあちゃんのところ置いてきたの。(間)今まで黙っていてごめんね。

明子 (エコー) 礼子叔母さんが、礼子叔母さんがわたしのお姉さん?!

ナレーション わたしにはショッキングな出来事でした。でも、母のほうに精神的に動揺していましたから、わたしは自分に“しっかりしなくては”と言い聞かせました。けれども、独りきりになった時、わたしの胸には、怒りとも悲しみともつかぬものが、どっとこみ上げてきたのです。

明子(モノローグ) (泣きじゃくりながら) パパなんか嫌い！ ママと結婚した時に、礼子姉さんも引き取ってくれば、お姉さん、あんな苦労しないで済んだのに。それなのに、そのお姉さんが離婚しなきゃならないっていうのに、あんなにママに冷たくするなんて。自分のおなかを痛めた子どもの、ママが動揺するのは当たり前じゃない。それを、それを…。パパなんか嫌い。大っ嫌い！

ナレーション 大好きな父でした。でも、その時以来、わたしは父を憎いと思うようになりました。その上、原因の分からなかったわたしの病気は、甲状腺の異常が原因だということが分かりました。こののち、病状がどう進展するのか、果たして完全に治るのかさえ、おぼつかないのです。わたしは心身ともに疲れ果て、目の前が真っ暗になるような気がしました。

明子(モノローグ) わたしは今、何をしたらいいんだろう。わたしはどうして生まれたの？ みんなに心配をかけるだけ。お姉さんだって、わたしが生まれなければ、きっと幸せになれたんじゃないのかしら。なぜ、なぜわたしは生きていくちゃいけないの？ だれかにこのモヤモヤした気持ちを分かってもらいたい。でも、だれも分かってくれはしない。ママだって、親友だって――。

ナレーション わたしは、父を憎いと思うようになってから、人間不信に陥ってしまいました。親しい友達に話しかけるときの、「いけない」と分かっているながら、つい口調が厳しくなりました。そして、そんな自分に腹を立ててはイライラし、たまらなく悲しくなるのでした。

明子(モノローグ) どうしてわたしは他人を責めるのだろう。わたしにそんな資格があるのだろうか？ 自分だって、醜い人間の一人じゃないか。ああ、なんて自分は醜いだろう。

ナレーション わたしは、このままではどうにかなってしまうと思いました。生きていることは意味がない。いや、生きてはいけないんだとさえ考え始めていたのです。そんな自分が恐ろしくなり、一体どうしたらいいんだろうと思いつめた時、不思議なことに“教会”のことが、わたしの心に浮かんだのです。

ある日、わたしは母に向かってこう言いました。

明子 ママ、わたし、教会へ行ってみたい。

母 アコちゃん。ママも一緒に行くわ。

ナレーション わたしのすさんだ毎日を見守っていた母は、目の前に一筋の光が差し込んだような気持ちになりました。それに、母自身も心のよりどころを求めていたのだと思います。

早速次の日曜日に、二人は、近くの練馬バプテスト教会に行きました。高校生会の普喜さんという方が親しく語りかけてくれました。

普喜 上野さん、聖書で言っている“罪”って分かる？

明子 なんとなく。

普喜 では、自分が罪びとであると思う？

明子 はい。

ナレーション わたしは、普喜さんの問いに、自分でも驚いたくらい素直に、うなずきました。わたしにとって“罪”とは、“生きていること”のように思えました。人は生きていること自体で、罪を犯していると感じたのです。生きていることが重苦しく感じられました。それでも、すぐに神を信じるということには、程遠い心境でした。

明子(モノローグ) わたしも生きる目的のようなものが欲しいなあ。でも、教会の人たちは本当に神様を信じているのだろうか？ そうは思えない。“信じている”と思い込んでいるんじゃないのかしら。

ナレーション しばらくして、わたしは入院することになりました。入院中、友達、学校、教会とも離れて、全くの独りになりました。それは、わたしにとって、自分自身を静かに見つめ、新しい生き方を求めるよい機会となりました。

明子(モノローグ) 今のわたしではないわたしになりたい。人間にとっての“真理”というようなものを知りたい。せめて、わたしが生きるための真理だけでも欲しい。

ナレーション 数か月たち、わたしの病気は次第に快方に向かいました。その間中、普喜さん始め教会の方々が、わたしのために熱心に祈ってくださったことを、あとで知りました。

普喜 明子さん、体の具合がいいなら、高校生のキャンプがあるんだけど、参加してみない？ 聖書の勉強もすれば、みんなでゲームもする。楽しいわよ。

ナレーション わたしは、“ひよっとすると、求めていたものが見つかるかもしれない”という気持ちで、キャ

ンプに行きました。キャンプ1日目の夜——。

音楽

(BGM)

明子

クリスチャンの人って、本当に神様を信じているの？

普喜

そうよ。

明子

“信じている”と思い込んでいるだけじゃないの？

普喜

違うわ。本当に信じているのよ。

明子

どうしてそう思うの？

普喜

神様がわたしたちを愛してくださっているのが分かるのよ。

明子

神様の愛って何？

普喜

わたしたちの罪のため、イエス様が死んでくださったの。わたしたちは、神様の愛によって罪から解放されるの。

明子

じゃあ、信仰って束縛じゃないの？

普喜

ううん。人間は罪に束縛されているの。信仰は人をその罪から解放するのよ。本当の自由なのよ。

ナレーション

わたしは、目を開かれた思いでした。それまでわたしは、“自分はすべての人に負い目を負って生きている。生きていることが罪なんだ”という意識に捕らわれすぎて、キリストの十字架が見えなくなっていたのでした。

明子(モノローグ)

もしわたしが神様を信じなかったら、今のまま。でも、もし信じたら、何かあるかもしれない。この重荷から解き放たれるかもしれない。それがどんなものか、分からないけれど。でも、そこに飛び込んでみなければ、それは分からない。

ナレーション

その翌日の集会で、わたしは招きの声に応じて、イエス様を受け入れる決心をしました。

音楽

(賛美歌)

明子(祈り)

(エコー)イエス様、わたしは何も分かりません。でもわたしが罪びとであることを認めます。そして、あなたがわたしの罪を背負って、十字架にかかってくださったことを信じます。どうか、わたしをお赦^{ゆる}してください。どうかわたしを導いてください。

<完>